『モダン・ユートピア』(2)[1)]

第 1 章第 7 節〜第 2 章第 2 節

H. G. ウェルズ著　小澤正人訳

第１章　地誌（承前）

7

植物学者の考えをもっと価値のある方向へ向ける必要があります。この控えめな後悔、割り込んできた些細な恋愛話を無視することが必要です。彼にはここが本当に〈ユートピア〉なのだということが理解できないのでしょうか？
是非とも言っておきたいのは、意識を私のこの〈ユートピア〉に集中させて、地球の世俗的厄介事は本来あるべき惑星に置き去りにしておきなさいということです。現代の〈ユートピア〉が必要とする諸命題が私たちをどこに連れて行こうとしているのか分かるでしょうか？　地球にいる全ての人がここにいなければなりません――その人自身なのですが、ただ相違点はあります。この世界のどこかこの辺りに、例えばチェンバレン氏がいて、英国国王も（もちろんお忍びで）ここにいて、王立美術院の全員もサンドウもアーノルド・ホワイト氏もいるのです。[2)]

しかし、こうした有名な名前が彼の興味を引くことはありません。

私の精神はこうした高名で代表的な著名人の間を次々に移っていき、しばらくの間同伴者のことを忘れてしまいます。私はこの一般的命題がその後に引きずっている興味深い派生的問題に心を乱されています。何某氏もいるし、別の何某氏もいるでしょう。ルーズベルト氏[3)]の名前と姿が突然はっきりと見えてきて、ドイツ皇帝を馴化させようという試みを消滅させてしまいます。〈ユートピア〉はルーズベルト氏に対して例えば何をするのでしょうか？　私の想像の視界をよぎって〈ユートピア〉の警官との猛烈な争いや、雄弁な抗議で何百

万人もの地球人を感動させた声が流れていきます。争っているうちに逮捕令状が落ちてしまい、私の足元に飛んできます。じっと眼を凝らして、紙片を読むと――だがそんなことがありうるのでしょうか――「社会の崩壊を企て？……人口のバランスの？……　混乱を助長した？」

私の論理の流れは私たちを一度だけ滑稽な小道へと導きました。実際、これに調子を合わせて心地良い小さな〈ユートピア〉を書いてもよかったのかもしれません。中世の画家たちの聖家族図（あるいはミケランジェロの「最後の審判」）のように、様々な度合いで友人たちを褒めているようなものを。[4]あるいは『ゴータ年鑑』[5]全体に関する思索的考察に取り掛かってもいいかもしれません。それはエピステーモンが夢に見た、地獄落ちした大人物たちに関する話に沿ったものとなるでしょう。[6]そこでは、

> クセルクス王は芥子はいかがと叫んで居りましたし、ロムルスは食塩売りとなり……

あの比類なき列挙目録！　あの比類なき列挙目録！　私たちは〈パロディを司る女神（ミューズ）[7]〉に刺激され、『名士録（フーズ・フー）』[8]の頁に、さらには頑固な共和国に眼を向けて『アメリカ名士録』へとさえ向かうかもしれませんし、この上なく楽しく大規模な配備をしようとするかもしれません。さて、このもっとも優れた人々をどこに入れましょうか？　そして、この人はどこに？……

しかし、実際には、私たちが〈ユートピア〉の旅をしている間に、こうしたそっくりな分身の誰かしらに会うことがあるかどうか、あるいは、会った時にその人だと分かるかどうかは疑わしいでしょう。この二つの世界双方を立派に有効利用できる人がいるとは思えません。まだ探検していないこの〈ユートピア〉での偉人は、私たちの世界では村のハムデン[9]に過ぎないかもしれませんし、地球の山羊飼いや無名の読み書きもできない無学者がこちらでは大人物の地位にいるかもしれないのです。

こんなことを考えていると、再び私たちの両側に快い展望が広がってきます。

しかし、私の植物学者が再びその性格を介入させてきます。彼の思考はこれまで私とは異なる経路を辿っていたのです。

「彼女はここにいるほうがもっと幸せになるだろうと、分かっているんだ」と彼は言う。「それに、地球にいた時の評価よりももっと良い評価を受けるだろうということは分かっている」

彼が邪魔をしてきたので、私は古い新聞や中身のない記事によって膨らまされた人気者の肖像、つまり、地球での偉人たちについての一時的な黙想から引き戻されます。これによって私はもっと個人的で親密な適用を考え始めて、じかに知っているのとほとんど同じくらいに良く知っている人間や、人生の実際に共通する本質について考え始めます。彼が私を、対立と優しさ、相違と失望に関する考えへと向けます。私は突然、そうであったかもしれない物事に直面させられるという苦痛を感じます。あの中身のない楕円形が並ぶ〈ユートピア〉の代わりに、あきらめてしまった愛や、失われてしまった機会、私たちのほうを向いてくれたかもしれない幾つもの顔にこの世界で出会ったならどうなるでしょうか？

私はほとんど非難するようにして植物学者のほうを向きます。「ねえ、ここでは彼女は君がフログナルで知っていたのと同じ女性ではないんだよ」と私は言い、立ち上がって、もはや興味を持てなくなった主題から無理にも離れます。

「それだけではなくて」私は彼に覆いかぶさるように立って言います。「彼女に出会う確率は百万分の一位だし。……　それに私たちは無駄な寄り道をしている！　これは私たちがここに来ようとしていた目的ではないし、より大きな計画の中で偶然に生じた欠点に過ぎないのだから。事実は依然としてそのままだ。私たちがここに来て出会った人たちは私たちと同じ欠点を持った人々で――ただ条件が違っているだけなのだ。私たちの探究の主旨を追いかけようじゃないか」

こう言って私はルツェンドロ湖の端を回って〈ユートピア〉の世界へ向かう道を先にたって進んでいきます。（皆さん、彼がそうしているところを思い浮かべてください。）私たちは山を下り、峠を降り、谷が開けるにつれて世界が

開けてきます――ユートピアです。そこでは、男女は幸福で、法は賢明ですし、そこでは、人の世の出来事の中でもつれ混乱していることが何もかも解きほぐされ、正しいものとなっています。

第２章　自由に関して

1

さて、〈現代のユートピア〉である惑星上の坂を下る二人の男にはまず第一にどんな種類の疑問が浮かぶのでしょうか？　多分彼らの個人的な自由に関する深刻な懸念です。私がすでに言及したように、過去の様々な〈ユートピア〉は〈異国人〉に対して友好的な面をほとんど示しませんでした。ひとつの惑星全体に広がるこの新しい種類の〈ユートピア国家〉のほうがそれよりも排他性が少ないということがあるのでしょうか？

普遍的な〈寛容〉とは間違いなく近代的な観念であり、そして近代的な観念の上にこそこの〈世界国家〉が存在しているという考えに私たちは慰めを見出すべきでしょう。しかし、たとえ私たちがこの不可避的市民権を許され、認められていると仮定したとしても、依然として広範囲にわたる様々な可能性が残っています。……　まず、第一原理の研究からこの問題を解決しようとしていくべきでしょうし、また、「〈人間〉対〈国家〉」のような問題を取り上げて、〈自由〉に関してどこまで譲歩できるかを議論することで、私たちの時代と種類が持つ傾向を辿っていくべきだろうと私は考えます。

個人の自由という観念は近代思想のそれぞれの発展段階の進展にあわせて重要性を増してきましたし、今も増しつつあります。古典的な〈ユートピア〉構築者たちにとって自由は比較的に些細なものでした。明らかに、彼らは、美徳と幸福が自由から完全に分離できるものであり、総じて自由よりも重要なものだと考えていました。しかし、近代的な見解は、個人性とその唯一性の意義についての主張を強めていくにつれて、着実に自由の価値を高めて、遂に今では私たちは自由を人生の本質そのものとみなし、また、実際それこそが人生であって、死んでいるもの、選択権を持たないものだけが法則に絶対的に服従しているのだと考えるようになりました。各人の個人性に自由に活動する余地を

与えることは、近代の見解においては、存在することの主観的な勝利なのです。一方、創造的な作品や子孫の中に生き残っていくことは客観的な勝利となります。しかし、人間は社会的な生き物なのですから、全ての人間にとって意志の働きが完全な自由にまで達することは不可能なことに違いありません。人間の完璧な自由は、絶対的であり、かつ全員を服従させている専制君主にのみ可能なのです。その場合であれば、意志を働かせることは、命令し、達成することとなるでしょうし、自然法則の範囲内で、いかなる瞬間においても、私たちがやりたいと思うことをその通りにすることができるでしょう。それ以外の自由は全て私たち自身の意志の自由と、私たちが付き合っている人たちの意志との間の妥協なのです。組織化された国家においては私たちの一人一人が他人や自分に対してどんなことをして良いのか、また、他人が自分にどんなことをすることができるのかに関するある程度細かく作られた規則体系(コード)を持っています。各人は自分の諸権利で他の人たちに制限を加えるし、また、他の人たちの諸権利と全体としての共同体の福利に影響を与える様々な配慮によって自分が制限されています。

共同体における個人の自由は、数学者が言うこととは違って、常に同じ記号(サイン)なわけではありません。このことを無視するのは、〈個人主義〉と呼ばれる熱狂(カルト)が持つ本質的な誤謬です。しかし、本当は、国家における一般的な禁止が自由の総量を増大させ、一般的な許可は自由の総量を減少させるかもしれません。こうした人々が私たちに信じ込ませようとしていることとは違って、法が最も少ない時に人間がより自由であり、法が最大の時により制限を受けているということにはならないのです。社会主義や共産主義は必ずしも奴隷制ではないし、〈無政府社会〉の下には自由はありません。誰もが殺人の自由を持っているという事態がなくなった時にどれほどの自由を得ることになるのかを考えてみると良いでしょう。そうなれば、地球上の治安が保たれた場所ならどこででも武器や鎧に邪魔されることなく、ふざけて毒を飲まされるとか、気まぐれな床屋とかホテルの落とし戸といったものを恐れることなく行き来できるようになるでしょう。[10]はっきり言って、これは一千もの恐怖や警戒から自由になることを意味しています。何世代にもわたって受け継がれていく敵討ち殺人が

仮に制限付きでさえも存在していると仮定した場合、自分たちの住む郊外でどんなことが起こるだろうかと考えてみればいいでしょう。[11]現代の郊外で二つの家族が仲違いした上に照準が正確な近代兵器を手に入れたらどんな不都合が生じるか、お互い同士にとってだけでなく、無関係な通行人にとってもどんな不都合が生じるか、また、全員に関して実際にどれほど自由の損失になるかを考えてみるといいでしょう。肉屋などは、そもそも配達に来るとしてですが、その際には武装した車で来なければならないでしょう。……

こうしたことの結果として何が起こるでしょうか。現代の〈ユートピア〉は唯一独自の個人性が相互関係を発達させることに世界の最後の希望を見出しています。先に述べたような理由で、この現代の〈ユートピア〉においては〈国家〉が、自由を浪費し無駄遣いするような自由を全て効果的にそぎ落とし、しかもそれ以外の自由はひとつも失うことなく、その結果、最大の全体的自由を獲得するようになっていくでしょう。

自由を制限するにははっきり異なる二つの対照的な方法があります。第一は〈禁止〉、「汝なすなかれ」、第二は〈命令〉、「汝なすべし」です。しかし、条件付き命令の形をとる種類の禁止も存在しますし、これについては心に留めておく必要があります。これは、もしあなたがしかじかのことをするならば、しかじかのこともしなければならない、と告げるのです。例を挙げれば、もしあなたが雇い人と一緒に航海に出るならば、航海に適した船で行かなければならないということです。しかし、純粋な命令は無条件なものです。それは、あなたがどんなことをしたにせよ、あるいはしているにせよ、しようと思っているにせよ、あなたはこれをすることになっていると告げます。丁度、社会制度が、卑賤な両親の卑賤な必要性と悪しき法とを通して作用している時には、十三歳の子供を工場に働きに出すことになるように。禁止は人間の持つ限定を受けていない自由からある限定された部分を取り去りますが、それでも行動に関して無制限の選択の幅を残しておきます。彼はまだ自由であり続け、あなたは彼の海ほどもある自由からバケツ一杯分を取り去っただけです。しかし、強制は自由を完全に破壊してしまいます。私たちのこの〈ユートピア〉にはたくさんの禁止があるかもしれませんが、間接的な強制――もしそんなものを工夫できる

としても――はないし、また、命令はほとんど、あるいはひとつもないでしょう。今私に見える限りでは、現在のこの議論において、実際のところ〈ユートピア〉には積極的な強制が全くないはずだと思います。ともかく、大人の〈ユートピア〉住人にとっては存在しません――自ら負うべき罪として課せられるのでなければ。

2

私たち、この〈ユートピア〉世界での二人の〈外国人(エイトランダー)〉[12]は、どのような禁止の下にあるのでしょうか？　私たちには、出会った人間を誰彼なく殺したり、襲ったり、脅したりする自由がないのは確実ですし、私たち地球で訓練された人間がそれに違反することはまずありそうにないでしょう。そして、〈ユートピア〉における所有の観念についてもっと正確に知るまでは誰かの所有物となっているかもしれないと思われるものは、どんなものであっても、それに触れるには非常に注意深くなるでしょう。仮に個人の所有物でないとしても、〈国家〉の所有物であるかもしれません。しかし、その先に関しては、色々な疑問が出てくるかもしれません。今着ているような奇妙な衣装で、岩と芝生を横切るこの心地良い小道を選び、燻蒸消毒していないリュックサックと雪で濡れた鋲靴で、この上なく整然として秩序だった世界と考えられているところへと歩いてゆくのは正しいことなのでしょうか？　私たちは、初めて出会ったユートピア住人のそばを通り過ぎ、曖昧な動作で挨拶を返されて、相手が不審に思っている様子もないのに気付いて、内心満足を感じました。私たちが角を曲がり、谷を下っていくと、遠くのほうに見事に整備された道路らしいものがかすかに見えます。……

私の考えるところでは、あちこちに移動する自由を最大限に与えてくれないなら、近代的な精神を持つ人間にとって、渇望に値するユートピアではありえないでしょう。自由な移動は多くの人々にとっては人生の諸権利のうちで最も重要なものです――つまり、心が行こうとするところならどこへでも行けるということであり、あちこちに逍遙し、あれこれ見ることができるということです――そして、たとえ全ての逸楽、全ての安全、全ての高潔な規律をもってい

たとしても、これが拒絶されているのでしたら、彼らは依然として不幸でしょう。〈ユートピア〉の住人は、他の人々が大事に育て作ったものに損害を与えることは無しに、この権利を持っているということは確実で、それ故に、よじ登ることのできない壁や柵に出くわすこともないでしょうし、この山道を下ることが違反行為となってしまうような法律を見出すこともないでしょう。

しかし、それでも、丁度、市民の自由それ自体が禁止によって守られている妥協であるように、この特別な種類の自由にもそれ自体の制限があるに違いありません。絶対的な程度にまで高めれば、自由に移動する権利は、自由に侵入していく権利と区別が付けられなくなってしまいます。モアの〈ユートピア〉に言及した時に、アリストテレスの共産主義への反論に賛同して、示唆しておいたのですが、そうなれば人々は他人との耐え難いほどの接触がずっと続いている状態に投げ込まれてしまうでしょう。ショーペンハウアーが人間社会をヤマアラシの群れに喩えて、暖を求めて集まろうとするが、近寄りすぎても、あるいは離れすぎても不幸になると述べた時、彼は彼なりの辛辣な調子で、迫真のイメージで、アリストテレスの考えを完成させたのです。[13]エンペドクレスは、愛と憎悪との、また牽引と反発との、同化と相違の主張とのの不安定な作用として以外には、人生にいかなる意味も見出しませんでした。私たちが相違を無視する限り、個人性を無視する限り、でなら――ただそれが今までの全ての〈ユートピア〉に共通する罪だと私は考えているのですが――私たちは絶対的な主張をしたり、共産主義や個人主義や、そしてまた全ての種類の厳格な理論的制度を規定することができます。しかし、現実の世界は――ヘラクレイトスとエンペドクレスを現代化して言えば[14]――個人性の世界以上のものでもそれ以下のものでもなく、そこにおいては絶対的な善も悪もないし、質的な問題も全くなく、量的な調節があるだけなのです。普通の文明化された人々においては、移動の自由への欲望と、一定限度のプライバシーへの欲望、つまり明確に自分自身の所有物である一角を持ちたいと望む欲望とは同じように強いので、双方を両立させる境界線をどこに引くかということを考えなければなりません。

絶対的な個人のプライバシーを求める欲望が、非常に強いとか、あるいはい

つまでも続いているということは多分決してないでしょう。人類の大多数においては群居本能がとても強力であり、ごく一時的な孤立でさえも、単に不快なだけでなく、苦痛を感じてしまうほどです。野蛮人は自分が必要とするプライバシーを全て自分の頭蓋骨という容器の中に閉じ込めています。犬や臆病な女性たちと同様に、彼は見捨てられるくらいならひどい扱いを受けるほうを選びます。他人のいない場所や一人暮らしに慰めと爽快さを見出すのは、ほんの少数の複雑な現代的タイプの人だけなのです。それでも、安全に一人きりにならない限り、よく眠れなかったり、ちゃんと考えることができなかったり、あるいは美しいものを十分に鑑賞することができなかったりする、生の最良の部分を賞味することができなかったりするような人たちがいます。そして、そうした人のために移動の自由についての一般的な権利に何らかの制限を加えておくことは筋の通ったことでさえあるのです。しかし、こうした人々が持つ特定の必要性は、現代人がプライバシーに対して持っているほとんど普遍的な欲求の特別で例外的な側面であるに過ぎません。孤立するためというよりも、気のあった仲間といるためなのです。私たちは大群衆から離れて生きたいと思います。一人になりたいからではなく、私たちにとって特に魅力的であり、また、私たちを特に魅力的であると感じてくれるような人たちと一緒にいたいからなのです。私たちはそうした人たちと家庭や社会を作り、自分たちの個人性を彼らとの交流や、その交流に付随するいろいろな物事の中で活動させたいと思います。私たちは自分たちと似た者や自分たちが選んだ者のために、手に入る限りで最大の庭園や、囲まれた土地、大きな排他的な自由を欲しています。しかし、私たちと気の合わない人はとてつもなく大勢いて、彼らもまた私たちと同じように、しかし何らかの対立する方向への拡大を切望しています。こうした人々こそが、先に述べた個人的選択の拡張運動を阻み、プライバシーに関する妥協を必要としているのです。

この講演の出発点となった私たちの〈ユートピア〉の山腹から古き地球の混乱を振り返ってみると、こんな風に言えるかもしれません。つまり、地球でのプライバシーの必要と欲求は、現在は例外的に大きく、また、過去には今よりも少なかったし、未来になれば再び少なくなるかもしれないということ、そし

て、向こうの道をしばらく辿って行き着く〈ユートピア〉の状況にあっては実に処理しやすい規模にまで縮小されているだろうということです。しかし、これは個人性を何らかの共通のパターンに合わせて押さえつけることによってではなく、公共的博愛の拡張と、精神と礼儀作法の全般的な改善によってもたらされなければなりません。[15]つまり、同化によってではなく、現代の〈ユートピア〉自体が成し遂げた理解によってということです。人類の過去にあった理想的共同体は共通の信念を持つもの、共通の習慣と共通の儀式、共通の礼儀作法と共通の決まり文句を持つものでした。同じ社会に住む人々は各人が、明確に定められ了解された等級に応じて、同じ様式の服を着て、同じ様式で行動し、同じ様式で愛し、礼拝し、死んでいきました。全員が共感し、同じように知っていることでなければ、それを行うことも感じたりすることもありませんでした。白色であれ、黒色や褐色であれ、全ての民族の生得の自然な気質、つまり教育が破棄しようとしている自然な気質とは、均一性を強調することであり、そこの規則体系からの最も無害な逸脱に対してさえ全員が全く共感を持たないようにすることなのです。「奇妙な」服装をすること、「奇妙な」行動をとること、違った作法で食事をすること、違った食物を食べること、はっきり言えば、いかなることであれ確立した決まりに違反することは、単純素朴な人々の間に怒りを生み出し、敵意を掻き立てます。けれども、より独創的で、進取性を持つ精神の気質は昔からいつでもそうした革新を行おうとするものでした。

このことは、今現在の時代にとりわけ明白です。新しい機械類のほとんど激変的なとまで言えるような発達、新しい素材の発見、材料科学の組織的探究を通しての新しい社会的可能性の出現は、革新の精神に巨大で先例のない便宜を与えてきました。古い、地域ごとの秩序は世界中で解体されてきましたし、今も解体されつつあります。そして、いたるところで社会は溶解し、洪水に押し流された諸規則の残骸の中で人々は浮かび漂い、それでもなお、何が起こったのか全く少しも分かっていないのです。行動や優先度に関する古い地域的な権威とか、これまで受け入れられていた古い娯楽や雇用、日常生活での重要だが小さな事柄における行為に関する古くからの儀式、議論のもととなる事柄にお

ける古くからの思考の儀式は、打ち砕かれ、撒き散らされ、脈絡もなく混ぜ合わされて、ひとつの使い方が別の使い方と一緒にされたりしたのですが、それに代わる世界的な規模での寛容の文化もなく、互いの相違に対する礼儀正しい承認も、より広い理解もまだできていません。それで、現代の地球における宣伝活動は全ての人に対して混乱して、共感をもてないものになってしまいました。各階級が他の階級に対して非寛容的になり、集団は集団に対して非寛容的になり、接触は攻撃や比較、迫害、不快を呼び起こし、そして、より敏感な人々はいつでも、非共感的で、しばしば敵対的な観察にさらされているという感覚に過度に苦しめられています。一般大衆から何らかの形で分離されることなしに生きていくことは、その人間の個人的な特異性に正確に比例して、不可能になっているのです。

当然のことながら、事態は〈ユートピア〉では非常に異なっています。〈ユートピア〉には思いやりが充満しているでしょう。今の私たちのように、山の土で汚れたツイードの服を着て、ほぼ無限といえるほど遠い彼方にある世界でしか使えない英国紙幣以外にはお金を持っていない人間にとって、このことは安心感を与えてくれる前提に違いありません。そして、〈ユートピア〉の礼儀作法は、単に寛容なだけでなく、ほとんどどこにおいても我慢できるようなものでしょう。地球でなら散在するごく少数の人にしか理解されないような無数の出来事が、世界中どこででも完全に理解されるでしょう。振る舞いの卑劣さ、作法の粗雑さが、どのような共同体であっても、その共同体のいずれかの階層を明確に示す特徴となることはないでしょう。それ故に、プライバシーを求める、より粗野な理由はここには存在しないでしょう。そして、地球であまり教育を受けていない実に多くの人々を閉じこもりがちにし、防衛的にしているあの野蛮な種類の羞恥心についても、〈ユートピア〉の人々は彼らのもっと自由主義的（リベラル）な養育方法によってそれを免れていることでしょう。私たちが想像している教化された〈国家〉では、人々が集団で集まって公共の場で食事をしたり、公共の場で休息したり、娯楽を楽しんだりすることや、公共の場で働いたりすることさえも、地球でよりはるかにたやすいものとなっているでしょう。現在、私たちには多くのことに対してプライバシーを保つ必要性があるの

ですが、それは、実際には、過去における均質性から生じている公共の場での安心感から、未来における知性と養育に起因する公共の場での安心感への移行期におけるありかたであって、〈ユートピア〉ではその移行が完了していることでしょう。この問題を考察する際には、私たちは最初から最後まで常にそのことを心に留めておかなければなりません。

しかし、このようなことを認めたとしても、〈ユートピア〉には依然としてプライバシーを求める強い要求が残っています。部屋とか居住区画、家、館、ともかく人が何を維持しているにしても、それは個人（プライベート）のものであり、完全にその人の支配下にあるに違いありません。家を囲む塀の内側にある中央菜園や、ポンペイに見られるような邸宅（ベリスタイル）の中庭[16]を禁止するのは、苛酷で介入しすぎているように思われますし、家の外のちょっとした個人（プライベート）的領域を否定するのもそれとほとんど同じくらいに困難なのです。しかし、もし私たちがそれを容認してしまえば、それ以外の何らかの規定を作らない限り、次のような可能性を認めてしまうことになるのは明らかです。つまり、（万一その世界に貧富があるとするならば）より貧しい者は、高い塀に囲まれた邸宅の庭が次々と果てしなく何マイルも続く中を抜けていかなければ、広い土地の中で彼らのために取り置かれた小区画に辿り着いて休息することができなくなってしまうということです。こうした状況はすでに貧しいロンドン住民の悲惨な運命となっています。……　もちろん私たちの〈ユートピア〉は窪みひとつない道路や、都市同士を結ぶ美しく配置された交通網があって、高速の列車や自動車やその他の乗り物を運行して、人口を拡散させているでしょう。そして、何らかの先見的規定がなければ、居住区域が防御的な塀で囲まれた邸宅でできたエデンになってしまう可能性はあまりに大きくなってしまうでしょう。

覚えておかなければならないのは、これが量的な問題であり、どのような原則の主張によっても退けられてはいけないということです。私たちの〈ユートピア〉の住人たちは、委細を尽くした規則によってこれに対処していくだろうと私は推測します。その規則はきっとその地方なりの条件に応じて地方ごとに変わっているでしょう。家を越えたところでのプライバシーは占有する領域の広さに比例して支払いをしなければならないような特権となるかもしれません

し、こうしたプライバシーの許可にかかる税金は割り当てられた領域の二乗で増加するかもしれません。都市または郊外で、一平方マイルあたりの個人用囲い地を最大限どのくらい認めるかは決められているかもしれません。完全に個人のものとなる庭と、週に一日か数日だけ個人用として閉ざされ、他の時には行儀の良い公衆に開かれている庭との間に区別をつけることもできるでしょう。真に文明化した共同体において、その程度の侵入に不平を言うような人がいるでしょうか？　塀は高さと長さに応じて課税され、本当に自然な美観、つまり早瀬や滝、峡谷、展望台などを囲い込むことは許されないでしょう。そうして、移動の自由と、世の中から隔絶する自由という、重要で対立しあう要求の間には、理にかなった妥協が達成されるかもしれません。……

そして、こうした議論をしているうちに、私たちは坂を上り、ゴットハルトの頂を越え、トレモラ谷を下り、イタリアへ向かう道路に次第に近づいていきます。

それはどんな種類の道路となるのでしょうか？

注

1）『モダン・ユートピア』(1)は『愛知県立大学外国語学部紀要』第51号（2019年発行予定）に掲載予定である。解説を参照されたい。

2）ジョゼフ・チェンバレン（1836–1914）イギリスの自由党政治家。英国国王はエドワード7世（1841–1910、在位1901–1910）ヴィクトリア女王の長子。ユージン・サンドウ（1867–1925）はドイツ生まれで、近代ボディビルの父と呼ばれる。アーノルド・ヘンリー・ホワイト（1848–1925）はイギリスの著述家。ロンドンのイーストエンドを調査し、ユダヤ系移民に反対した。

3）セオドア・ルーズベルト（1858–1919）、第26代アメリカ大統領（1901–1909）。

4）ミケランジェロの「最後の審判」は教皇パウルス三世の命令でバチカン宮殿のシスティーナ礼拝堂に描いたもの（1535–1541）。四百人以上の人物が描かれ、裸像に批判的だった儀典長を地獄の裁判長ミノスのモデルとしたとされ、また聖バルトロマイの生皮の顔は彼の自画像であるとされる。

5）『ゴータ年鑑』はドイツのゴータで刊行される年鑑（1763–）で、ヨーロッパの王侯、貴族の詳しい系譜を記載している。

6）エピステーモンはフランソワ・ラブレー（1494–1553）著『ラブレー第二之書　パ

ンタグリュエル物語』（1532）中の登場人物で、パンタグリュエル王の教育係。戦いで大けがをして、瀕死の状態から蘇生した後で、地獄を見てきたと語る（第2部、第30章）。「この世で権威ならびない大名だった方々も、あの世へ行けば赤貧洗うがごとき、みじめな、賤しい生活を送って居られます。これに比べますと、哲人方やこの世で一文なしだった人々は、あの世へ行くと、今度は大した御身分の旦那方になって居られました。」（渡辺一夫訳、岩波文庫、1973、221頁）

次の引用はエピステーモンが長々と列挙する偉人たちの最初の部分（邦訳215頁）。クセルクス王は、クセルクセス一世（519？－465BC）でアケメネス朝ペルシャの王。ロムルスは、双子の兄弟レムスとともに狼に育てられたといわれる伝説上のローマの建国者。

7）ミューズ（ギリシア語でムーサ）は、ギリシア神話で、ゼウスと記憶の女神ムネモシュネとの間に生まれた九人の女神で、詩歌、文芸、音楽、舞踏、学問を司る。喜劇を司るのはタレイアだが、パロディを司る女神は不詳。

8）『名士録』は1849年にイギリスのA＆C・ブラック社から創刊された。『アメリカ名士録』はアルバート・ネルソン・マーキスが1899年に発行。

9）ジョン・ハムデン（1594–1643）は、17世紀イギリス清教徒革命（イングランド内戦）期の議会派政治家・軍人。詩人トマス・グレイ（1716–1771）は「墓畔の哀歌」（1751）で、名前も分からない村人の埋められた田舎の墓地にも、小さな暴君に立ち向かった村のハムデンのような人が眠っているのかもしれないと謳った（57行）。

10）19世紀中ごろの犯罪小説雑誌にはスウィーニー・トッドという架空の連続殺人犯が登場する。彼は床屋で、店の椅子に仕掛けをして、座った客を地下室に落として殺していた。

11）コルシカやイタリアではヴェンデッタと呼ばれるかたき討ちの習慣があり、殺された者の家族が殺した者の家族に復讐し、交互の復讐が何代にもわたって続くことがあった。

12）〈外国人（エイトランダー）〉は、元来は、南アフリカ共和国成立（1852）以前の旧トランスバール共和国・オレンジ自由州への白人移住者をさす語。OED 初出は1892年。

13）アルトゥル・ショーペンハウアー（1788–1860）はドイツの哲学者。ヤマアラシのジレンマは『余禄と補遺』二巻　白水社の『ショーペンハウアー随想録』第二部一三章。

14）ヘラクレイトス（紀元前540頃－紀元前480頃）は古代ギリシアの哲学者。「戦いは万物の父である」と述べ、万物流転説を唱えた。エンペドクレス（紀元前490頃－紀元前430頃）は古代ギリシアの哲学者。万物の元は地水火風であり、これらが愛憎によって結合したり離反するとした。

15)（原注）モア、『ユートピア』「家の中に入ろうと思えば誰でも自由に入ることができる。それというのも、家の内には私有のもの、つまり誰々個人のものといったものがないからである。」（訳注『ユートピア』第二巻第二章「都市、特にアモーロート市について」（平井正穂訳、岩波文庫、1957、77頁。）ここは Ralph Robinson の英訳からの引用なのでロビンソン版を底本とする平井訳を使用した。ラテン語版及び英語版については平井の解説や、澤田昭夫訳『改版ユートピア』（中公文庫、1993）の解説を参照。なお以下の注では『ユートピア』は澤田訳を使用する。）

16）ペリスタイルは、古代ローマの富豪の邸宅で柱をめぐらした中庭。

解説

ここに訳出したのは、H. G. Wells, *A Modern Utopia* (1905) 第 1 章第 7 節〜第 2 章第 2 節である。

第 1 章第 1 〜 6 節は「『モダン・ユートピア』(1)」として『愛知県立大学外国語学部紀要』（第51号、2019年発行予定）に掲載する。なお、第 2 章は全 7 節であるが、紙幅の関係から第 2 節までを訳出した。また、「序文」で言及されている「道具についての懐疑」は『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第19号（2018）に掲載した。

底本には下記の Penguin Classics 版を使用した。

H. G. Wells, *A Modern Utopia*, edited by Gregory Claeys and Patrick Parrinder, with an Introduction by Francis Wheen, and Notes by Gregory Claeys and Andy Sawyer. London: Penguin Books, 2005.

この Penguin 版は1925年に出た「アトランティック版作品集」を底本にしており、序文もそれを収録している。なお、1994年の Everyman 社版は初版 Chapman and Hall (1905) を底本にしており、適宜参照した。

普通名詞で大文字で始まる語・語句は〈　〉に入れた。

ウェルズは、ピリオドの後にさらにピリオドを 3 つ打つことがある。一般にはこれは省略を示すが、彼の場合にはそうではない。翻訳では読点後に……を置いた。

作中で言及される先行ユートピア作品について、プラトン、モア、モリスなど著名なものについては注を省いた。

この第 1 章では触れられていないが、『モダン・ユートピア』を今日的視点から読むにあたって大きな問題のひとつは優生学的提言であろうと思われる。これについては「H. G. ウェルズのユートピアと優生思想」を「愛知県立大学 多文化共生研究所」発行の『共生の文化研究』（第12号、2018）に載せたので参照されたい。